

言語からみたジェンダーの問題

Linguistic Gender and Feminist Movement

田中克彦*

Katsuhiko Tanaka

Abstract

Every human language may be classified into two groups: one has a strictly categorized grammatical gender, and the other has no such grammatical notion at all.

Grammatical gender is characteristic to the Indo-European languages, of which contemporary German and Russian, for example, preserve it through all grammatical systems, whereas English has lost it completely.

In languages such as English, linguistic feminism pursued the equality of sexes in social life through eliminating linguistic distinction of gender. For example, «chairman» was replaced by the neutral expression «chairperson».

In contrast, German has a complete pair of grammatical gender counterparts. So it is impossible to neutralize the distinction of gender and the feminist strategy pursued equal representation of both sexes. In case a German word lacks feminine counterpart, a new word had to be created according to grammatical gender distinction. For example, «Presidentin - female President» was created as a counterpart to «President - male President».

Because the Japanese feminist movement received its idea almost exclusively from that of the USA, its linguistic aspects also took English model of eliminating gender distinction. This model has fit the Japanese traditional mental climate in the sense that people prefer to conceal the truth under ambiguity, rather than expressing the state of things distinctly.

Such tendency cannot be expected to contribute reforming the Japanese traditional attitudes of sexism. We should learn more from German and Russian experiences than that of English.

1.

オトコとオンナという生物的区別を英語では 'sex' と言います。言語はこのような、いわば「自然の」区別に対応する区別を文法の中に、そのまますなおに反映することもあれば、そうでないばあいもあり、またそのような区別もたてにくいのに、むりやり区別してしまうことがあります。

ドイツ語を例にとりましょう。Vater (ファーター：父) は男性で Mutter (ムッター：母) が女性なのは、特におぼえなくても、すぐにわかります。それは、この区別が「自然性」の区別

* 一橋大学名誉教授、Emeritus Professor, Hitotsubashi University

にもとづいているからです。ところがMaus（マウス：ねずみ）は女性でHase（ハーゼ：うさぎ）が男性となるとこれはむづかしい。おぼえてなくてはならない。

また、「手」と「足」とは、どちらがオトコでどちらがオンナでしょうか。Hand（ハント：手）がオンナでFuss（フース：足）がオトコです。ドイツ語にはこのほかに中性というのがあって、Kind（キント：こども）が、まだオトコ、オンナに分かれる前の段階だから、これは中性として扱うというのはわかります。しかし、Löffel（レッフエル：スプーン）はオトコ、Gabel（ガーベル：フォーク）はオンナなのに、Messer（メッサー：ナイフ）が中性というのはよくわかりません。

それなのに、この性の区別をきっちりとおぼえていなければならないわけは、それによって冠詞も形容詞も別々の変化をするからです。つまり、この性の区別を知っておかなければ、簡単な会話にも不自由するからです。ロシア語ではその上、動詞の変化にも影響が出てきます。「お父さんがこどもをなぐった」というのと、「お母さんがこどもをなぐった」というのでは、「なぐった」という動詞が別の形をとるのです。

このような、「文法における」性の原理は、「インド・ヨーロッパ諸語」に属する言語の全体をつらぬいています。ただ英語は、この区別をすててしまったために、文法はすこぶる簡単になっています。いま文法の「区別をすてる」と言いましたが、別の表現をすると、「規則を乱し」破壊してしまったのです。乱れを起こすのは、たいてい子どもです。だから子どもがこうした「乱れ」を起したとき、おとなたちは、こどもをどんなに叱りつけたでしょう。とりわけ英語で「おまえ」も「あなた」も同じyouですませるようにしてしまったときなどは。ただ英語が今日のようになれたのは、この「乱し、破壊する」力が大きかったおかげです。私の好みの言いかたにしたがえば、ことばを発展させる力とは、乱す力なのです。「乱れ」の話はここできりあげて、性のはなしにもどります。

II .

文法すなわち、言語がたてる性の区別は、自然に存在する性とは別の原理にもとづいているということがこれであきらかになります。このことから、文法学者は、sexということばではとらえきれない、「生物学をこえた」別の原理、すなわち、言語の原理にたった区別の用語が必要だと思いにいたります。その結果生まれたのが、'gender' という用語なのです。その用語「ジェンダー」は生理的区別を超えた領域へとおよんで来た次第は皆様の御存知のとおりです。

III .

ことばの土台である文法からはじまった類別が、言語表現の全体にまでおよんでいる言語、たとえばドイツ語、ロシア語と、それを文法から追い出してしまった英語とでは、フェミニズム運動がとる方式や作戦も大きくちがってきます。

たとえば英語ではchairman（議長）に man という、もとはオトコだけを指す単語が入っているのはけしからん、オンナだってなることがあるんだというので、まずはオンナを表す chairwoman が生れ、次いでオトコ、オンナ両方を含み得る単語を作って chairperson と言うようになったはなしはよく知れわたっています。こうなったのは1960年頃かららしく、フェミニスト運

動のたかまりを示しています。こうなると、- manで終わる単語はすべて追放し、- personで入れかえなければならなくなる。私が英語の習いはじめにおぼえたmailman（郵便屋さん）もmailpersonでなければならなくなりました。私の生きている間に、英語がこんなに変わったので驚いています。

日本語にもこの波によって、「看護婦」さんは「看護師」と、性の区別のない表現に移りつつあることは、日々経験するところです。日本語にはもともと「性」は文法カテゴリーに組み込まれていないので、語彙的手続きによって、性別を絶滅させる方向に向かうのは英語と同様です。

IV .

ところが、性の区別が文法全体をつらぬいているドイツ語とロシア語ではどうでしょう。ここでは絶滅させるのではなく、区別をますますきわだたせる方向にすすんで行くのです。それは英語でいえば、chairmanに対して、chairwomanを作った段階にあたります。

たとえば、学長はRektor（レクタ）という男性形しかなかったので、Rektorin（レクターイン）と女性形をつくりました。ドイツでは、学長も新聞広告で募集することがあるので、そのばあい「学長、あるいは女学長を求む」としないと、「オンナを追い出した」とおこられるおそれがあります。

30年ほど昔の日本の記憶ですが、「社長のかたわらには美人の女秘書がひかえていた」とあるとき新聞が書いたら、この「女秘書」はずいぶん人をおこらせました。なんで「秘書」のまえにわざわざ「女」をつけるのかと。「美人」とともに「女」を特別あつかい、サベツしたという意味でしょう。

しかしドイツ語では「秘書」を単にSekretär（ゼクレター）と書いたら、皆がフンガイします。それは男性形であって、女用にはSekretärin（ゼクレターリン：女秘書）という女性形を使わないといけないのです。ロシア語では名詞の女性形は、社会主義時代にはあらゆる領域に及んだ結果、（トラクトリスト：トラクター運転手）に対して、（トラクトリストカ：女トラクター運転手）という形さえ産み出しました。

V .

以上で、「ことばとジェンダー」を考えるばあいに、性差を消し去る方向ときわだたせる方向と二つの方向があることを述べました。さて日本語では、ひたすら消し去る方向をよしとして進んできましたけれども、「きわだたせる」方向も考えてみたらいいと思います。そのとき、なぜ「きわだたせる方向が日本では始まらないのか」という問題が出てきておもしろいと思います。それは、日本文化に特有の「個性を消し去った上での平等主義」イデオロギーと深くからまりあった結果であることは明らかで、大いに議論の必要なところです。

VI .

この世に存在するもののすべて、いな、存在すらしらないのに人間が想像によって、存在すると思いついたすべてのものを、オトコ、オンナに分けて考えるのは、古代、存在のすべてが生きていると考えられたからです。しかし生あるものにはかならず「不生」、すなわち死の状態が想定されます。古代インド人のサンスクリット語には、「生きて動く水」と、「死んで動かない水」とを区別して、両者は別の名を与えて区別しました。

こういう研究をしたのはフランスのアントワーヌ・メイエ（1866～1936）という人です。ここではちょっとメイエの話に耳をかたむけましょう。

たとえばラテン語で例を見ればignis（火）はオトコでaqua（水）はオンナです。これはインド・ヨーロッパ諸語を話していた古代諸民族の神話世界を反映しています。そこではつまり、水も火も、性を帯びた生きものとして受けとられていたのです。

ところが、より新しい時代になると、神話世界から脱出して、モノを神ではなく、モノとして見る、より唯物的、客観的な自然把握の態度が出てくる。そうすると、モノはもはやオトコ、オンナの区別をすてて、文法的に中性ととらえる段階が現われる。ギリシャ語ではpyr（火）もhydōr（水）も中性になっている。またドイツ語でもFeuer（フォイアー：火）、Wasser（ヴァッサー：水）のいずれも中性になっているのは、これらの言語では、古代インドや古代ローマにあった神話的世界からの脱出と物質化が行われたせいだというのがメイエの大筋での考え方です。

メイエのこの研究は、今からおよそ一世紀前近くも前のものであり、私がこのフランス語の論文を読んだのは、およそ50年前の学生時代のことで、それ以後この分野の研究で、どのような進展があったか、お話しすることはできません。しかし1930年代のソ連で、V.アバエフという言語学者が、言語は近代化にともない、どんどん脱イデオロギー化して、いっそう技術的な面が強く現れるであろうと考えたことと、メイエの言語研究との間には何か平行関係があるように思われます。

以上の論議は人類言語の発展にかかわることであり、いまの「ジェンダー問題」に直接役立たないじゃないかと考えるむきもありましょうが、「ジェンダー問題」もまた人類史の重要な一面に属するものですから、以上の私がお話したことが、かならず、本質的な面で貢献するはずだと思えます。

VII .

最後にここで世界の言語問題からすれば、いささか普遍性にとぼしいのですが、漢字を使わない世界の他の言語の人には全く通用しない漢字における性の扱いという興味深い問題を考えてみましょう。

オンナへんは、「妨害」、「妄想」、「奸計」、「嫌疑」、「嫉妬」など、かんばしからぬ意味で多用されています。また「娯」、「宴」などは、オトコから見ると、なんでこのような場面がオンナに独占されていて、オトコが出てはいけないのかとむくれてしまいます。そうして「女秘書」ではひどくおこるオンナたちが、なぜ、こんな漢字を放置しているのか、私には釈然としないのであります。

この問題を考えるばあいの立場ははっきり二つに分かれます。一つは開催趣旨に引用されて

いるように、「漢字それ自身に差別の意味はなく符号に過ぎない」として、現状をそのまま受け入れてしまう立場です。ここで「符号」ということばを「習慣」といれかえてみましょう。「符号」とはある概念を、これこれの「ことば」、「これこれの文字で表すという」習慣のことです。だから、言語とは「習慣」の体系であり、このような習慣のことをデュルケムやソシュールは、「社会的事実」という用語で、社会学のなかに定着させました。それは、個人の外にあって個人を超え、そうして個人に対して絶対的支配力を及ぼす「力」のことを表わします。それは個人の精神も支配下におきます。だから、決して「すぎない」と言えるほど軽いものではないのです。こうした、個人の意識をしばる言語にむかって変革をせまる運動は、およそ変革運動のなかでも最も困難な課題の前に立っており、ソシュールもこのことから「言語には革命は生じえない」と言っているくらいです。それをあえてやろうという第二の立場は、いつも良識ある世間から子どもじみた思いつきとしてせせら笑われます。そのようにしてせせら笑う態度が、開催趣旨に引用された王寧氏の発言に表わされています。

しかし、ここがだいじなところなのですが、それにもかかわらず、すべての言語は習慣を破り、古いイデオロギーを捨て去って、文法すらも作りかえてきた歴史をもっています。いな、変わらなかった言語はこの地上には一つもないのです。しかし漢字は変わらなかったというよりも変わらないものとして守られてきた長い歴史があります。それは変わらなかったというよりは、変わることを好まず許さないぞ、という人間の意識のたまものです。この「意識」がどこからやってくるかを考えて行くと、社会と文化を成り立たせている根源の問題につき当たることとなります。

参考文献

- 田中克彦 2001年 『差別語からはいる言語学入門』、東京：明石書店。
- Meillet, Antoine 1958. "La catégorie du genre et les conception indo-européennes", *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris: Champion, pp.211-229.